

---

# 星の照らす道

やしろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星の照らす道

### 【Nコード】

N43540

### 【作者名】

やしろ

### 【あらすじ】

進路の選択で1度は思ったこと、ないでしょうか。

10年後のあなたは、何をしていると思いますか？

よくある質問だ。そして、これ以上ないくらい滑稽な質問。

明日のことだつてわからないっていうのに。そもそも10年後に生きていられる保証もない。

だから私はいつも、この手の質問には鼻で笑ってきた。その方がちやんと現実を見ているような気がしたから。

でも、本当はただ怖かったのかもしれない。

自分の将来像なんて、想像もつかないから。

リアリストを気取って、冷静を取り繕って、器用に目を背けていた。それだけだったのかもしれない。

「それじゃ、関原は進学ってことでいいな」先生の言葉で締めくくられる、私の進路面談。

時計を見ると、3分間行われていたことがわかる。

3分間。短いのかどうかは、正直よくわからない。決定事項の確認だけだったわけだから、長かったくらいかもしれない。

大学への進学。これが、私の進路。とくに反対もされなかったし、迷いぬいて決めたわけでもない。

大人は不思議だ。つくづく思う。自分の道は自分で決める、なんて言っておきながら、無難な選択ならまず反対しない。そのくせ、上京してミュージシャンになります、なんて言えば絶対にいい顔しない。よく考える、なんて言う。

そういう人ほど、私なんかより真剣に人生かけているのに。

だから、少し羨ましいと思う。でも真似したいとは思わない。しな

くていい苦労まではしたくないと思う。  
無難な、つまり多くの人が選ぶ道に追随していれば、少なくとも世の中の流れに逆らうことにはならない。  
流れに逆らうことは、怖いことだ。たくさんのエネルギーがいる。敵も多い。

以前、駅前で路上ライブをしている人たちをみかけた。歌がうまかったのもあるけど、夢を追う姿というのがかつこよくて、ファンになった。通りかかれば、塾に遅刻しそうでも必ず足を止めた。拍手を送った。

けれど、ある日酔っぱらいにからまれて、弾いていたギターを壊されたのを見た。喧嘩になって、警察の人たちが来た。警官に取り押さえられながら、酔っぱらいのおじさんはずっと叫んでいた。  
へたくそ。クズ。現実見る。やめちまえ。

それを遠目に見てから、思ったのだ。  
夢を追うということは、こういうことなんだって。理不尽な仕打ちを受けて、踏みにじられる。

それなら、私は無難に生きたい。そうすれば、失敗しても、きっと志ある彼らほど傷つかなくていいだろう。  
皆が選ぶ道だったから、私もそうした。

そんな予防線を張っておけば、誰かのせいでできる気がするから。自分の選択を後悔するなんてごめんだ。自分を責めるなんて、したくない。傷つきたくない。

あれ以来、彼らを見かけなくなった。  
だから、私の価値観はきつと、正しいのだ。

「遙、面談終わったんならかえろーぜー」のんきに声をかけてくるのは、幼馴染の陸也だ。とても進路の分岐点に立つ高3生とは思えない。

「あんだ、面談終わったの？」

「ん。おれらのクラスの先生、仕事早いから。おれなんて、3分で終わったもん」

「すげー早いっしょ、と笑う陸也に、私は笑い返すことしかできなかった。」

「私も3分だったの、とは、なんとなく言えなかった。」

「最近、暗くなるの早くなったよなあ」陸也が空を見上げながらつぶやく。

夏はもう終わった。秋だって、すぐに終わってしまうだろう。そして厳しい冬がやってくる。光を失っていく空を見上げて、

「そうだね」とだけ答えた。冬は暗い時間が長い。あたりまえのことなのに、なんだか心細くなる。

「明るい未来は、ほんとうにやってくるのだろうか、と。」

「陸也は、進路面談、なんて言ったの？」なるべく何気なく聞こえるように注意しながら言ってみた。

「家業継ぐって言った」あっけからんと答える陸也に、迷いなんて微塵も感じられなかった。

陸也の家は自営業だ。一人っ子だから、陸也が継ぐほかない。本人も、それをとくに不満に感じている節はない。もう修行は始めているらしいから、やる気もあるんだろう。

少し羨ましい。自分でいちいち考えなくても、ちゃんと道が用意されている。あとはたどっていけばいいんだから。

私は、選択の自由というのをあまりありがたく思っていない。

「選びたいと思うほど、私は目標を持っていないから。」

「遙は？」

「進学する。知ってるだろうけど。受験勉強してるし」

「そうじゃなくてさ、将来なにになりたいわけ？」

言葉に詰まった。大学入って、それから先。将来はその先も続く。

わからない。私は、いったい、どうしたいのか。何になって、何をしたいのか。

わからないの。

「公務員、かな」正直なことは言えずに、思いついたことを言ってみる。一番無難な進路に思えた。

「なんで？」陸也はつつこんでくる。

「ほら、収入安定してるでしょ。苦勞がなくていいじゃない」

「本気で、そう思ってるの？」

え、と声が自然に漏れた。

「遙さあ、本気で公務員目指してる人にすげー失礼だよ」声だけは普段通りのように聞こえるが、間違いない。陸也は怒っている。

「だいたい考えが甘い。苦勞しないわけないじゃん。公務員試験の倍率、知ってる？仮に通ったとしても、それ以降苦勞しないなんてそんなわけないだろ」

私は、何も言えなかった。陸也の言うとおり、私は何も知らない。

「何選んだって、どこ行っちゃって、いくらでも嫌なことがあるし、信じられないくらいひどいことを言うやつがいる。安易な考えでそういう場に出れば、絶対後悔する。で、自分には向かないんだって思うことになる」

本当は、それ以前の問題なのにさ、と陸也は言って、遠くを見るような目になる。

陸也は自営業で、社会に密接なぶん、私よりもそんな場面に出くわすことが多いのだろう。

私は、自分の甘さを、未熟さを、考えのなさを、それでも認めたくなかった。

理由もわからずに罵声を浴びせられた歌手志望の彼らの姿が強く残っていたからかもしれない。

だから、陸也に吐き出した。

路上ライブの彼らのこと。その姿に憧れたこと。理不尽な言葉。壊されたギター。そのときの彼らの表情。

忘れられない。淡い希望が黒く塗りつぶされた、あのときのこと。

陸也は黙って聞いていた。途中で口をはさむこともなかった。

「目標持たないのって、そんなに悪いこと？」私は話しの最後にそう聞いた。

認める。私は、確固としたビジョンが見えている陸也が羨ましい。

「おれ、思うんだけどさ」陸也は長い沈黙のあとに口を開いた。

「目標って、持とうと意気込んで持つものじゃないと思うんだ。自然に、やりたいことができる。その、歌手志望の彼らだって、やりたいからやってたんだ。義務じゃない。自分で納得するまで考える。誰も責任なんか取ってくれないんだからさ」

自分の人生なんだから。陸也は、そう言っつて、笑った。

「だからさ、遥も悩めよ。妥協せずに、納得するまで。借りものはすぐにだめになるけど、自分で出した結論なら、最後まで持ち続けられる。そういうもんなんじゃない？」

悩む。考える。選ぶ。どれも3分の進路面談では収まりきらない。

10年たつても、50年たつても、生きていられるかぎり、私は自分に問い続けるのかもしれない。

何がしたい？どうなりたい？

きつと、そうやって悩み続けていくんだろう。

「ま、もしどーしても決まらなかつたら、そんなときはおれんここに来いよ。嫁にもらつてやるから」

陸也があまりにさらつと言うので、私は吹き出した。

あ、笑いやがったな、とむくれる陸也を横目に、私は思う。

難しく考えることはないのかもしれない。ただ、自分に問い続けることをやめなければ。いつか、自分の中から答えは返つて来る。今なら、そう思える。

すっかり暗くなった空には1番星が輝く。

10年後の私も、こうして星を綺麗だと思えるといいな。

冬の長い夜には、星がこんなにも瞬くのだから。

(後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます！私もまだ主人公と同じ状況です。感想いただけると嬉しいです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4354o/>

---

星の照らす道

2010年10月21日21時23分発行